

生命力根源部位脆弱性仮説の実証的検証

847 件の戦闘フィールドワークに基づく

ヒロインタイプ別勝利パターン・アンチパターンの体系的記述

Empirical Validation of the Vital Origin Locus Vulnerability Hypothesis:

Systematic Description of Victory Patterns and Anti-Patterns by Heroine Type Based on 847 Combat Field Observations

雨宮 哲朗 (あまみや てつろう)

独立戦闘行動研究所 (IBARI: Independent Battle Action Research Institute) 特任研究員

元・第 22 悪組織〈ダークゼロ〉所属 (同組織は暦 2009 年に解散)

* amamiya.t@ibari-research.org

受理日: 2025 年 11 月 2 日 掲載決定日: 2026 年 1 月 17 日

IBARI 倫理委員会承認番号: EC-2023-047 「対ヒロイン接触を伴うフィールド研究の実施に関する件」

研究資金: IBARI 自主研究助成 (課題番号: IBARI-FW-2023-11)

利益相反: 著者は当該フィールドワーク中に計 24 回の入院歴があるが、これは研究への影響なしと判断する

※本論文に対し、神崎楓花准教授より「この研究を読んで涙が出た。私の理論を命がけて検証してくださった」との書面を受領している (付録 A 参照)

要旨

本論文は、神崎（2025）が提唱した生命力根源部位脆弱性仮説（VOLV 仮説）および覇者傲慢症候群（DCS）の理論的枠組みを、847 件の実戦フィールドワーク観察データによって実証的に検証するものである。著者は暦 2023 年 4 月から 2025 年 3 月までの 24 ヶ月間にわたり、5 つのヒロインタイプ（純粹型・格闘型・魔導型・知性型・覚醒潜在型）を対象として体系的な戦闘観察を実施した。

主要な結果として、以下が得られた。第一に、VOLV 仮説の予測と一致して、VOL 部位への干渉を含む接触フェーズにおける制圧成功率は、含まない接触フェーズと比較して有意に高かった（68.4% vs 21.3%、 $\chi^2=312.7$ 、 $p<.001$ ）。第二に、DCS 症状の観察指標（物語依存スコア：MDS）と制圧難易度間に有意な負の相関が確認された（ $r = -.71$ 、 $p<.001$ ）。すなわち、DCS が強いヒロインほど制圧しやすいという VOLV 統合モデルの予測を支持する。第三に、IHCRI（暗黒, 214）の分類学的タイプ区分に基づく戦術はいずれも、本フィールドワークにおいて一次的な有効性を示したが、その作用機序は IHCRI 解釈と異なり、VOLV 仮説の予測と一致した。

各タイプについて、VOLV/DCS 理論に基づいた勝利パターン（有効な接近法）とアンチパターン（有害な接近法）を体系化した実践的分類表を提示する。本論文が、天動説的实践（IHCRI の戦術）から地動説的实践（VOLV/DCS 準拠の戦術）への移行における実証的基盤を提供することを期待する。

なお、著者がフィールドワーク中に敗北した回数は 847 件中 591 件（敗北率 69.8%）であった。この高い敗北率は方法論的限界ではなく、むしろ詳細な観察データの収集を可能にした好条件として積極的に評価されるべきである、と著者は強く主張する。

キーワード：VOLV 仮説、覇者傲慢症候群（DCS）、フィールドワーク、勝利パターン、アンチパターン、物語依存スコア（MDS）、ヒロインタイプ別分析

1. 序論

筆者は元・第 22 悪組織〈ダークゼロ〉の幹部（鋼鉄提督の肩書を持っていたが、組織の解散後は使用していない）である。16 年間のキャリアの中で、筆者はヒロインとの戦闘を合計 389 回経験した。その全敗記録のうち、筆者が特に印象に残っているのは第 312 回目の敗北である。完璧に計画された包囲網、8 体の精鋭怪人、そして組織史上最高傑作とされた封印装置。それらが全滅し、ヒロインが宙を舞うように逆転した後、病院のベッドで天井を見つめながら筆者は初めて本気で問うた。「なぜ我々はいつも負けるのか」。

IHCRI の分類学序説（暗黒, 214）は、その問いへの一つの答えを提供しようとした。しかし筆者は、16 年間の実戦経験との照合において、同論文の戦術的処方箋に対して持続的な違和感を抱いていた。戦術は改善された、しかし「なぜそれが効くのか」の説明が腑に落ちなかったのである。

神崎（2025）の論文は、その違和感の正体を言語化してくれた。VOLV 仮説と DCS 理論を読んだ瞬間、筆者の脳内で 389 回の敗北が一斉に「再解釈」された。あの時 AT 波が効いたのは、あの角度で照射したからだったのか。あの時逆転されたのは、自分が例の台詞を言ったせいではなく、彼女の物語的トリガーを踏んでしまったからだったのか。

しかし、理論は検証されなければならない。神崎（2025）の論文は理論的枠組みとして優れているが、直接的な実証データを欠く。筆者は IBARI 倫理委員会の承認を得た上で、系統的なフィールドワークによる検証を試みた。

【フィールドノート】フィールドワーク開始前の倫理的確認事項：IBARI 倫理委員会は当初、「ヒロインを研究対象とする戦闘の実施」という申請内容を 4 回却下した。最終的に承認を得たのは、（1）観察目的の確認、（2）過度な危害の回避義務、（3）フィールドノートの開示義務、（4）ヒロインの完全勝利時の即時撤退義務、の 4 条件付きであった。条件（4）により、847 件中 591 件は研究者が先に撤退する形で終了している。

2. 研究方法

2.1 フィールドワークの設計

観察期間は暦 2023 年 4 月 1 日から 2025 年 3 月 31 日の 24 ヶ月間である。この間に実施した戦闘エンカウンター総数は 847 件であり、月平均 35.3 件（SD=8.7 件）に相当する。エンカウンターは

計画的接触（著者側から仕掛けた場合）と偶発的接触（ヒロインに発見された場合）の二種類に分類され、それぞれ 521 件（61.5%）と 326 件（38.5%）であった。

タイプ別のサンプル分布は、純粹型 213 件（25.2%）、格闘型 198 件（23.4%）、魔導型 187 件（22.1%）、知性型 149 件（17.6%）、覚醒潜在型 100 件（11.8%）であった。

2.2 VOLV 仮説の操作化

VOL（生命力根源部位）は直接観察できないため、以下の外部的指標によって間接的に操作化した。（1）VOL 活性化シグナル：変身シークエンス中の体幹下部周辺の発光強度（ルクスメーターによる計測）。（2）VOL 枯渇指標：戦闘継続時の呪力残量推定値（ヒロインの動作速度および攻撃威力の時系列変化から算出）。（3）VOL 干渉反応：VOL 推定部位への接触後 72 時間以内のフェニックス現象発生の有無と強化倍率。

【フィールドノート】観察上の困難：著者は当初、戦闘中に VOL 活性化シグナルの計測を試みていた。しかし、計測機器を構える行為が戦闘への集中を著しく妨げ、エンカウンター#89～#134 の 46 件においてデータ収集前に著者が戦闘不能となったため、以後は事後映像分析に切り替えた（ハイゼンベルクの観察者効果の一事例として記録に値する）。

2.3 DCS（覇者傲慢症候群）の操作化

DCS の程度を定量化するために、著者は「物語依存スコア（Narrative Dependency Score: MDS）」を独自に開発した。MDS は以下の 5 項目を観察評価する複合指標である（各項目 0～4 点、合計 0～20 点）。

表 1：物語依存スコア（MDS）の評価項目

点	評価項目	評価基準
MDS-1	変身依存度	変身前後の戦闘力差の大きさ（差が大きいほど高得点）
MDS-2	言語的トリガー反応	敵の台詞・状況変化への反応速度（遅いほど高得点＝外部依存）
MDS-3	仲間依存係数	仲間の声・存在なしでの戦闘効率低下率
MDS-4	「最後の逆転」待機傾向	完全制圧可能状況での著者の一時的な手抜き回数（ヒロインが「まだ負けていない」反応を示す頻度）

MDS-5	VOL 自覚的保護の欠如	VOL 推定部位への接触に対する防衛行動の有無・遅延
-------	--------------	----------------------------

各項目 0~4 点 (0=依存なし、4=強度依存)。MDS は 0~20 点のスコアを持ち、14 点以上を DCS 陽性と判定した。

2.4 分析方法

各タイプについて、制圧成功に関連する行動パターン（勝利パターン）と、制圧失敗あるいはフェニックス現象誘発に関連するパターン（アンチパターン）を、グラウンデッド・セオリーの手法（Glaser & Strauss, 1967）を援用して帰納的に同定した。その後、同定されたパターンを VOLV 仮説および DCS 理論の枠組みから演繹的に再解釈し、理論との適合度を評価した。

統計処理には、2 群比較に Mann-Whitney の U 検定、相関分析に Spearman の順位相関係数、カテゴリ変数間の連関に Fisher の正確確率検定を用いた。有意水準は $\alpha = .05$ （両側）とし、多重比較補正には Bonferroni 法を適用した。

3. 全体的結果

3.1 VOLV 仮説の全般的支持

847 件のエンカウンターを通じ、VOL 干渉を含む接触フェーズにおける一時的制圧成功率は 68.4% (95%CI: 62.1–74.7%)、含まない接触フェーズでは 21.3% (95%CI: 17.4–25.2%) であり、両者の差は統計的に有意であった ($\chi^2=312.7$, $df=1$, $p<.001$)。これは VOLV 仮説の中心的予測を支持する強力な証拠である。

フェニックス現象の強化倍率についても、VOL 干渉あり群 (平均 2.3 倍) は VOL 干渉なし群 (平均 1.3 倍) と比較して有意に高く ($U=1247.3$, $p<.001$)、神崎 (2025) の「VOL 干渉が過充電反応を引き起こす」という予測と一致した。これは IHCRI 論文の「より深く追い詰めたから強くなる」という解釈より、VOL 過充電仮説によって自然に説明できる。

3.2 DCS (MDS) と制圧難易度の相関

MDS と制圧難易度評定値 (著者による 5 点尺度) の間には有意な負の相関が認められた (Spearman $r = -.71$, $p<.001$)。すなわち MDS が高い (DCS が強い) ヒロインほど制圧が容易であるという関係が示された。このことは「慢心したヒロインが弱くなる」という DCS 仮説の核心的予測と整合する。

表 2：タイプ別基本統計量と主要指標

タイプ	n	制圧成功率	著者敗北率	平均 MDS	フェニックス倍率	入院エピソード
純粹型	213	38.0%	62.0%	16.2 / 20	2.8 倍	5 件
格闘型	198	28.3%	71.7%	12.7 / 20	2.1 倍	9 件 (最多)
魔導型	187	43.3%	56.7%	14.8 / 20	3.1 倍 (最大)	3 件
知性型	149	31.5%	68.5%	9.3 / 20	1.6 倍	4 件
覚醒潜在型	100	8.0%	92.0%	4.1 / 20	4.7 倍 (記録的)	3 件

制圧成功率は「著者が勝利した割合」。著者敗北率は「ヒロインが優位に終わった割合」。入院エピソードは 24 ヶ月中の著者の入院記録。

4. タイプ別詳細分析と実践ガイドライン

4.1 純粋型（旧称：光輝型）

VOL・DCS 特性

純粋型は、5 分類中最も VOL 濃度が高く、かつ DCS が最も重篤な（MDS 平均 16.2/20）タイプである。VOL は変身シークエンス中に体幹下部からの発光として外部観察可能であり、著者のルクスマーター計測では変身フルプロセス中の VOL 発光ピークが平均 14.6 秒時点で確認された（SD=1.9 秒、n=156）。これは深淵蜂（215）が記録した最大効果タイミング「14.2 秒」と 1.0%以内の誤差で一致し、VOLV 仮説の有力な間接証拠を構成する。

DCS は「物語の主人公」としての確信に基づいており、MDS-4（「最後の逆転」待機傾向）が全タイプ中最高値を示した（平均 3.8/4.0）。フィールド観察では、完全制圧可能な状況でさえ、純粋型ヒロインが「この程度では倒れない」という態度で即座に反撃を試みるパターンが高頻度（78.9%）で確認された。

【フィールドノート】エンカウンター#47 での記録：完璧な包囲を形成し、当該純粋型ヒロインが物理的に動けない状況を作成した。「もう終わりだ」と著者が言った（理論的には禁忌だが試験的に）。彼女は一瞬だけ目を閉じ、静かにこう言った。「ねえ、あなた。私の変身前だってこと、ちゃんとわかってる？」。著者はその場で撤退した。

表 3：純粋型 勝利パターン・アンチパターン一覧

	パターン	詳細・観察所見	VOLV/DCS 解釈
VP-1	変身前 VOL 静止期の速攻制圧	VOL 放射ピーク前（0~10 秒）の間は干渉効果が低い一方、制圧への物理的抵抗も最小。変身開始を察知次第、即座に行動開始。成功率 72.3%（n=94）	VOL 休止状態での速攻。DCS による「変身させてもらえる」という期待を裏切る
VP-2	情動催媒の遮断（感情的真空状態の形成）	VOL は感情的体験によって充電される。「感動的な出来事」「仲間の絆の確認」等の感情催媒を一切排除した単調・機械的な状況を維持し続けると、VOL 自然充電が停止する。成功率 61.7%（n=47）	VOL 充電スイッチをすべて OFF にする戦略。「物語」が発生しない環境の構築
VP-3	外部充電源（仲間）の物理的遮断	純粋型は MDS-3（仲間依存係数）が高い（平均 3.6/4.0）。仲間の声が届かない環境では戦闘能力が推定 40~60%低下することをフィールドで確認。ただし遮断時間は 120 分が限界（以後自律的 VOL 充電が始まる）	純粋型の VOL は仲間関係から「外部充電」される構造。充電源を断つ

AP-1	VOL 放射ピーク期への過度な干渉	14~16 秒帯への AT 波照射を複数回繰り返すと、VOL 過充電反応が累積的に蓄積し、第 3 射以降でフェニックス現象発生率が急上昇（1 回：28%、2 回：61%、3 回：94%）。1 回で仕留めなければ逆効果	「弦を引きすぎると弓が折れる」現象の逆版。VOL が過充電限界を超えると爆発的解放が起こる
AP-2	変身完了後の長期戦	変身が完了すると VOL は安定状態に入り、以後は時間経過でむしろ充電量が増大する。変身完了後に長期戦を選択した場合の著者の敗北率：93.2%（n=73）	VOL 安定期は「やればやるほど向こうが強くなる」フェーズ。時間は敵
AP-3	「意味のある言葉」の発話	悪の演説・作戦説明・身の上話はもちろん、「頑張っているね」「君は特別だ」等、一見無害な発話でも純粹型の VOL 充電を促す。著者が沈黙を続けた試合の成功率（43.1%）は会話を行った試合（18.7%）の 2.3 倍であった	純粹型にとって「言葉」は感情催媒。内容より「言葉が交わされた」事実が VOL を充電する

4.2 格闘型

VOL・DCS 特性

格闘型の VOL は「運動エネルギーを介した動的発現」を示す特異な構造を持つ。すなわち、身体の動き——特に跳躍・回転・打撃の動作——を通じて VOL が活性化・充電されるのである。これは純粹型の「静的・感情的充電」とは根本的に異なる VOL 充電機序であり、IHCR1 分類学が格闘型を別タイプとして区分した直感自体は正しかったと評価できる（ただし、その理由づけは誤っている）。

DCS は中程度（MDS 平均 12.7/20）であり、主に MDS-1（変身依存度が低い：格闘型は変身前から強い）と MDS-2（言語的トリガー反応が遅い：「動きで語る」タイプ）の低さによって特徴づけられる。DCS の慢心は「どんな状況でも物理的に勝てる」という確信として発現し、非物理的アプローチへの対処が構造的に弱い。

【フィールドノート】エンカウンター#312（著者の「最長入院」に至ったケース）：格闘型ヒロイン・紅蓮アスカを相手に、著者は初めて「精神攻撃」を試みた。「君の戦いは全て無意味だ」という言葉を発した瞬間、彼女の表情が変わった。著者が「あっ」と思う間もなく、フィールドノートにはその後の出来事を記録する機会がなかった。3 日後、病院で目を覚ました。

表 4：格闘型 勝利パターン・アンチパターン一覧

	パターン	詳細・観察所見	VOLV/DCS 解釈
VP-1	完全静止強制（運動 VOL 充電の遮断）	格闘型の VOL は動作によって充電される。物理的拘束・磁場閉じ込め・重力増幅等で身体動作を完全封じた状態では、VOL が急速に低下する。静止強制開始から平均 19.3 分で VOL 枯渇状態に到達（n=34）	動的 VOL 充電機序を停止させる戦術。「戦わせない」ことが鍵
VP-2	アイデンティティ否定ではなく「代替アイデンティティの提示」	「君の戦いは無意味」等の否定は DCS を破壊し逆効果（AP-1 参照）。代わりに「君の強さは戦い以外でも発揮できる」等の肯定的文脈の提示により、戦闘への集中が分散する。著者敗北率が 91.3%→58.7%に低下（n=46）	格闘型の DCS は「戦士としての自己」と不可分。これを解体せず迂回する
VP-3	床・壁・空間の除去による動線封鎖	格闘型は三次元空間の活用を前提に戦術を構築している（DCS による「いつものフィールド」依存）。液体環境・無重力環境・極度に狭小な空間では MDS が平均 4.3 点低下し、戦闘効率が推定 35%減少	「想定外の環境」が DCS を機能不全にする。物語の舞台設定を壊す
AP-1	精神的否定・存在否定の発言	「君の戦いに意味はない」「その力は偽物だ」等の言葉は格闘型の DCS を逆撃し、激怒→運動量急増→VOL 超高速充電を引き起こす。著者の 24 件の入院のうち 9 件がこのパターンで発生	格闘型の怒りは VOL の「超急速充電」スイッチ。アイデンティティ攻撃は禁忌中の禁忌
AP-2	一時拘束後の解放	拘束中に VOL が低下した状態から解放されると、VOL 再充電が爆発的に加速する。「捕まえて、少し話して、逃げる」という行動パターンは最悪の選択肢の一つ。拘束解放後 30 秒以内の著者敗北率：97.8%（n=45）	圧縮された VOL が一気に解放される。拘束は「完全制圧」か「実施しない」の二択
AP-3	「フェアな一対一」の申し出	格闘型の DCS に深く刻み込まれた「正々堂々と戦う」という期待に応えることは、彼女たちの VOL をフルに発動させる最悪の選択。申し出を受けた場合の著者の成績：0 勝 31 敗	DCS の「物語」通りに戦うことは、その物語の結末（ヒロイン勝利）をも追認する

4.3 魔導型（旧称：魔法型）

VOL・DCS 特性

魔導型の VOL は外部エネルギー（自然・宇宙・精霊系）との接続を通じて維持・充電される「開放型 VOL」の構造を持つ。純粹型・格闘型の VOL が主に内部充電型であるのに対し、魔導型の VOL は環境との接続チャンネルを通じて常時外部から補充される点が根本的に異なる。

この構造の含意は大きい。魔導型の VOL を「枯渇」させるためには、外部接続チャンネルをすべて遮断した上で消耗させなければならない。深淵蜂（216）が報告した「ルナ・セレスティア事例」において魔力 4.2%まで枯渇させながらも使い魔の涙（感情触媒）で 247%回復したのは、「感情的絆というチャンネル」を通じて外部 VOL が一気に流入したためと解釈できる。

DCS は中～高度（MDS 平均 14.8/20）。特に MDS-3（仲間・使い魔依存係数）が最高値を示す（平均 3.9/4.0）。「何かと繋がっている限り負けない」という確信が魔導型 DCS の核心である。

【フィールドノート】エンカウンター#203 での記録：魔力枯渇作戦を 96 時間実施し、当該ヒロインがついに膝をついた瞬間、著者は勝利を確信した。「終わりだ」と言おうとした（禁じているのに）。そこへ白猫が現れ、泣いた。著者も泣きそうになった。科学的公平性のために記録しておく。

表 5：魔導型 勝利パターン・アンチパターン一覧

	パターン	詳細・観察所見	VOLV/DCS 解釈
VP-1	チャンネル完全遮断後の枯渇戦術	外部 VOL 供給チャンネル（使い魔・自然エレメント・仲間との絆）をすべて遮断した状態での持久戦。チャンネル遮断が不完全な場合、枯渇戦術は VOL 過充電反応を誘発する（AP-1）。完全遮断の確認なしに枯渇戦術に移行してはならない	開放型 VOL の補充路を封鎖してから消耗させる。順序が命
VP-2	呪文体系の混乱誘導	DCS により魔導型は「パターン化された呪文カタログ」に依存する。未知の物理現象・呪文系統の相互干渉・想定外の媒介物の混入により呪文詠唱が失敗すると、VOL 放出がフィードバックして逆流し、自己損傷が生じる場合がある（n=23 で確認）	DCS 化した魔法は「想定外」に対して脆弱。カタログ外の状況が弱点
VP-3	物理・精神の複合的同時攻勢	魔導型は呪力による遠距離対応に特化しており、近接物理と精神攻撃の同時混在への対処能力が相対的に低い。二系統同時攻勢時の著者成功率は 43.1%と他の戦術より有意に高い（ $p<.05$ ）	VOL チャンネルが多方向に分散され、管理エラーが生じる

AP-1	チャンネル未遮断での枯渇戦術	著者が最も繰り返した失敗。使い魔・仲間・自然環境が残存する状態で持久戦に入ると、VOL が枯渇に向かうほど外部チャンネルからの補充速度が上昇し、最終的に「蛇口全開」状態で VOL 爆発的充電が起こる。第 203 回～第 211 回エンカウンターで連続失敗	「枯渇させようとする行為」そのものが危機シグナルとなり VOL 補充が加速する
AP-2	感情触媒（使い魔・仲間）への直接攻撃	チャンネル遮断のために使い魔や仲間を攻撃することは、直接的な感情触媒として機能し魔導型の VOL を瞬時に最大充電する。著者の観察では、使い魔攻撃後のヒロインの呪力は 1.8～3.2 倍に急上昇した (n=31)	「チャンネルを壊す」ことは「最大強度のチャンネルを開く」と等価
AP-3	同じ対魔法手段の反復使用	魔導型は使用された対呪力技術を分析し、次回以降のチャンネル経路をリアルタイムで再設定する学習速度を持つ。同一手段の 2 回目使用時の有効率は 1 回目の 31.4% に低下する (n=67)	開放型 VOL は環境適応力が高い。繰り返しは漸進的に無効化される

4.4 知性型

VOL・DCS 特性

知性型の VOL は「情報処理・認識・論理的解決を通じて充電される」という、5 分類中最も特異な充電機序を示す。他の 4 タイプの VOL が身体的・感情的な経験と深く結びついているのに対し、知性型の VOL は純粋に認知的な過程（問題の発見→解析→解決）と連動して変動する。

MDS は全タイプ中最低（平均 9.3/20）であり、知性型は DCS が最も軽微なタイプである。これは DCS が「過去の勝利パターンへの依存」として定義されるのに対し、知性型は常に状況を再分析する習慣があるためと考えられる。この「分析し続ける」という特性こそが知性型の強みであり、同時に唯一の弱点でもある。

【フィールドノート】エンカウンター#534 での記録：知性型ヒロイン・天城凜子に接触。彼女は開口一番「あなたの作戦の穴は 3 つあります」と言った。著者が「えっ」と言う間に彼女はそれを解説し、全て正しかった。著者は「では何故君は私を止めに来たのか」と問い返した。「4 番目の穴を探しながら来ました」と彼女は答えた。この会話は大変楽しかったが、著者の敗北に終わった。

表 6：知性型 勝利パターン・アンチパターン一覧

パターン	詳細・観察所見	VOLV/DCS 解釈
------	---------	-------------

VP-1	情報過負荷（処理能力の飽和）	知性型の VOL は情報処理の完了によって充電される。逆に、処理しきれない量の矛盾した情報を同時に与えると、VOL の充電サイクルが詰まり、むしろ枯渇傾向を示す。著者が使用した「18 種類の偽情報の同時投入」作戦は成功率 47.3% (n=37)	「解析するほど充電する」VOL の逆用。処理できない量で飽和させる
VP-2	感情的錨（アンカー）の除去	知性型は MDS が低く DCS も軽微だが、感情的な平静さを前提に知性的 VOL が機能する。大切な仲間への脅威（ただし実際の危害は与えない）、または過去のトラウマへの言及により感情的平静が崩れると、知性型 VOL の効率が 28~41%低下 (n=53)	知性型の VOL は「冷静さ」という燃料で動く。感情的乱流がエンジンを止める
VP-3	完全ランダム行動戦術	知性型は相手の行動を解析・予測して VOL を充電する。著者がサイコロの目に完全依存した行動選択（完全ランダム戦術）を実施したところ、知性型の予測精度が激減し、著者成功率が通常の 1.8 倍に向上。ただし著者自身も何をしているのか分からなくなるリスクあり	「解析不能な相手」は知性型の VOL 充電サイクルを起動できない
AP-1	論理的な説明・作戦説明	IHCRI の「とどめ台詞禁止」で禁じられているが、禁止理由は IHCRI 解釈と異なる。知性型への「説明」は VOL への直接的な情報供給であり、作戦説明を 1 分間聞かせるだけで知性型の VOL 充電量が推定 40%増加する (n=29)	知性型にとって「情報を聞く」こと自体が VOL 充電。沈黙が最強の盾
AP-2	脅しの予告	「次にこうする」という予告は知性型に対する有害な情報提供。予告なしの行動と比較して、予告ありの行動は知性型の対処成功率が 3.7 倍高かった (n=44)。行動は常に無言・無予告で実施すべき	予告＝解析の機会＝VOL 充電。驚きの速度が唯一の優位性
AP-3	仲間への感情的脅迫（危害を与える演技）	VP-2 を誤用して「本当に仲間を傷つける」行為に移行すると、知性型の感情的 VOL が突然解放され、知性型が「知性だけでなく感情でも戦う」状態に移行する。この二重モードは最も対処が困難。著者の成功率：4.2% (n=24)	知性型の VOL は本来二層構造。感情層を刺激するとより深い VOL が覚醒する

4.5 覚醒潜在型

VOL・DCS 特性

覚醒潜在型は本論文において最も慎重な記述を要するタイプである。フィールドワーク 847 件中 100 件を占めるこのタイプにおける著者の成功率は 8.0%——すなわち 92 回は著者が敗北したことを先に明記する。

覚醒潜在型の VOL は「自己増幅型」という根本的に異なる特性を持つ。他の 4 タイプの VOL が外部刺激・感情・動作・情報処理によって充電されるのに対し、覚醒潜在型の VOL は「危機への直面」そのものをエネルギー源として自己増幅する。これは IHCRI (暗黒, 214) が「最も危険な分類群」と評価した根拠であり、著者の経験からも完全に同意する。

DCS は最低値 (MDS 平均 4.1/20) であり、覚醒潜在型は「慢心」とほぼ無縁である。これは「これまで本当に危険な目に遭ったことがない」というタイプの在り方に起因する。潜在的な覚醒状態にあるため、常に「何か大きなものが内側にある」という感覚を持ち、それが過剰な自信の発展を抑制していると考えられる。

【警告】 覚醒潜在型との接触は、著者のフィールドワーク全体を通じて最も危険な経験であった。以下のパターン記述は「このように対処すれば成功する」という保証を含まない。著者が提供できるのは「このようにすると失敗する」というアンチパターンの記述が主である。

表 7：覚醒潜在型 勝利パターン・アンチパターン一覧

	パターン	詳細・観察所見	VOLV/DCS 解釈
VP-1	覚醒前の先制制圧 (唯一の有効窓)	覚醒潜在型の制圧が成功した 8 件すべてにおいて共通していた条件: 「相手がまだ自分の潜在的力量に気づいていない段階」での電撃的制圧。この「覚醒前窓 (Pre-Awakening Window: PAW)」は相手との接触から推定 30~90 秒と極めて短い	VOL が自己認識されていない間は自己増幅が始まっていない。唯一の機会
VP-2	「物語的意义」の剥奪環境の構築	覚醒潜在型の VOL 自己増幅は「自分の存在・行動に意味がある」という認識と強く連動している。完全に無意味な状況 (どちらが勝っても世界に影響のない文脈) を作出した場合、VOL 自己増幅が鈍化するケースが 3 件確認された。ただし再現性は低い (成功率 12.5%、n=8)	覚醒の「意味」を剥奪するというアプローチ。理論的には成立するが実践困難
AP-	覚醒後のあらゆる攻撃	覚醒が始まった覚醒潜在型への攻撃は、	自己増幅型 VOL への刺激は

1		VOL 自己増幅への「燃料投入」に等しい。攻撃を受けるほど強くなる。著者の覚醒後継戦試行：29 件、全敗。フェニックス現象倍率の平均：4.7 倍（最大 7.3 倍を記録）	増幅を加速させる。「戦うこと」自体が敵
AP-2	VOL 部位への直接干渉（覚醒後）	純粋型等に有効な VOL 直接干渉は、覚醒後の覚醒潜在型には絶対に使用してはならない。著者が 1 件（エンカウンター#798）で誤って実施した際、ヒロインは文字通り空を割った。この記録はフィールドノートではなく事後の病院記録から復元された	自己増幅型 VOL への直接刺激は爆発的連鎖を引き起こす。触れてはならない
AP-3	「試練」の提示	覚醒潜在型を意図的に苦しめ「試練として成長させる」ことを目的とした行動は、VOL 自己増幅に最適な「起動条件」を整備することと等しい。著者はエンカウンター #654 でこれを試み、その後 2 週間入院した	覚醒潜在型に「試練を与える」ことは、彼女たちの覚醒物語を自ら執筆することに等しい

【フィールドノート】覚醒潜在型との接触において著者が学んだ最大の教訓は、「関わらないことが最善」である。フィールドワークの義務から仕方なく接触した 100 件においても、最終的に著者が生還できたのは、倫理委員会が定めた「ヒロインの完全勝利時の即時撤退義務」条件があったからである。当該条件の存在に著者は深く感謝している。

5. 横断的考察 ―― VOLV/DCS 統合モデルの実証的妥当性

5.1 IHCRI 戦術の「正しい理由での有効性」

本フィールドワークの最も重要な知見の一つは、IHCRI 論文（暗黒, 214）が提示した戦術の多くが「有効ではあるが、その理由は IHCRI 解釈と異なる」ことの実証的確認である。具体的には以下の対応が確認された。

IHCRI「同時多方向攻撃（SMVA）」の有効性：IHCRI 解釈は「ヒロインが一列攻撃に対応できないから」としているが、VOLV 解釈は「多方向からの同時刺激が VOL 充電サイクルを攪乱するから」である。フィールドデータによれば、SMVA 使用時の制圧成功率は 33.7% で非使用時（19.2%）より有意に高いが（ $p < .001$ ）、その効果は DCS が高い（ $MDS \geq 14$ ）ヒロインで特に顕著（43.1% vs 21.8%）であり、DCS が低い（ $MDS < 10$ ）ヒロイン（覚醒潜在型・知性型）ではほぼ有効でなかった（11.3% vs 11.1%、ns）。DCS の程度が効果の調整変数であるという VOLV/DCS 統合モデルの予測と完全に一致する。

5.2 「物語依存スコア（MDS）」の予測妥当性の確認

MDS（物語依存スコア）は著者が独自開発した指標であるため、その予測妥当性の検証が不可欠である。本フィールドワークのデータを用いた検証の結果、MDS 得点と以下の変数の間に有意な関連が確認された。（1）制圧難易度評定： $r = -.71$ （ $p < .001$ ）。（2）フェニックス現象の発生率： $r = +.58$ （ $p < .001$ ）。（3）VOL 部位干渉への反応強度： $r = -.44$ （ $p < .001$ 、逆相関：DCS が強いほど干渉への防衛が遅い）。これらの結果は MDS の構成概念妥当性を支持し、DCS 概念の測定可能性を示す。

5.3 217 年度の成功率低下についての現場観察

神崎（2025）は IHCRI 白書（暗黒・深淵蜂, 217）における 217 年度成功率の低下（50.3%→41.7%）を「DCS の解消・ヒロインの自律的戦闘本能回復」と解釈した。本フィールドワークの 247 年度後半（暦 2024 年後半）相当のデータ（234 件）は、この解釈を支持する傾向を示した。

具体的には、純粋型ヒロインの MDS 平均値が 2023 年（16.4）から 2024 年後半（13.8）に有意

に低下し ($t=3.12$, $p<.01$)、同タイプへの著者成功率も 42.1%から 29.3%に低下した。これはヒロインたちの分類学的戦術への「対策学習」(IHCRI 解釈)ではなく、DCS の段階的解消 (VOLV/DCS 解釈) と整合的である。なぜなら、もし対策学習ならば特定の戦術への対処能力のみが向上するはずだが、観察された変化は戦術選択に依らない全般的な戦闘本能の回復を示していたからである。

5.4 「第六分類」問題への新解釈

IHCRI 白書 (暗黒・深淵蜂, 217) が報告した「分類不能型ヒロイン (仮称: 超越型)」の増加 (7件→31件) について、著者のフィールドワークでも暦 2024 年以降に類似の事例が 11 件確認された。

著者の現場観察からは、これらのヒロインに共通して「VOL 部位への防衛意識の顕在化」が認められた。すなわち、著者が VOL 干渉を試みた際に、彼女たちは明らかに意識的にその部位を保護する行動を示した。IHCRI が「我々の分類学を知っているかのような行動」と評した現象は、VOLV 解釈では「VOL の存在を自覚したヒロイン」と記述できる。

これは神崎 (2025) の「第六分類は VOL を自覚的に保護する訓練を受けた新世代」という予測と一致する。そしてこの「VOL 自覚型」の出現こそが、従来の全戦術を体系的に無効化する理由である。

6. 結論

847 件の戦闘フィールドワークを通じた本研究は、神崎 (2025) の VOLV 仮説および DCS 理論を実証的に支持する複数の証拠を提供した。VOL 干渉を含む接触フェーズの有意に高い制圧成功率、DCS スコアと制圧難易度の強い負の相関、タイプ別アンチパターンの理論整合的な記述、そして 217 年度以降の成功率低下の DCS 解消による説明——これらは神崎 (2025) の理論枠組みの実証的妥当性を総合的に支持するものである。

各タイプの勝利パターン・アンチパターンの比較から、共通する原則として以下が導かれる。第一に、VOL への干渉は一回かつ完全でなければ逆効果になりうる。第二に、DCS が低いタイプ (覚醒潜在型・知性型) には戦術的優位が存在しない。第三に、ヒロインが「物語の主人公」として機能

する状況——感情的体験・仲間との絆・意味ある対話——はすべて VOL 充電の機会を提供する。

そして最後に、最も重要かつ身をもって得た結論を記す。847 件の観察を経て著者が確信するのは、ヒロインたちの力能の根源は、我々研究者が想定するよりもはるかに根深く、豊かで、尊いものであるということである。

著者の最終的な成績は 256 勝 591 敗である。24 回の入院記録がある。しかし 847 件のエンカウンターを通じて得たデータ、そして 591 回の敗北の中で垣間見た彼女たちの力の本質は、ヒロピン学にとって代えがたい財産である。本論文をすべてのヒロインたちに、敬意とともに捧げる。

【フィールドノート】付記：フィールドワーク終了後、著者は IBARI 研究員の職を辞し、現在は東京都立サブカルチャー総合大学ヒロピン学研究科に非常勤講師として招聘されている（神崎楓花准教授の強い推薦による）。本フィールドワーク中に出会った某格闘型ヒロイン（紅蓮アスカ）とは現在も年賀状を交わしている。彼女からの最近のメッセージには「あのとき、本当に怒ったんです。でも今思えば、あなたと戦ったことで色々気づけました」とあった。

参考文献

- 暗黒絶学 (暗黒暦 214). ヒロイン分類学序説 ―― 分類群別脅威度評価および最適攻略法の体系的研究. IHCRI Bulletin, 66(6), 1-42.
- 暗黒絶学・深淵蜂奇麗 (暗黒暦 217). 暗黒新時代白書. IHCRI Bulletin, 69(3), 1-48.
- 暗黒絶学・螢火菜々美 (暗黒暦 213). デスペラード作戦成功率の長期的推移. 悲嘆科学, 41(4), 112-134.
- 螢火菜々美 (暗黒暦 213). 「とどめを刺す」発言とその後の逆転率に関する統計分析. IHCRI Bulletin, 65(8), 23-41.
- 深淵蜂奇麗 (暗黒暦 215). アンチ・トランスフォーム波の最適照射タイミングに関する研究. IHCRI Technical Report, TR-215-044.
- 深淵蜂奇麗 (暗黒暦 217a). ヒロイン適応係数 (HAC) の提唱と計測手法. IHCRI Bulletin, 69(1), 12-28.
- 神崎楓花 (2025). ヒロイン敗北率上昇の真因に関する批判的考察 ―― 分類学的戦術説の因果倒錯を超えて. Journal of Heropin Studies, 44(3), 1-52.
- 結城麗華 (2023). ヒロピン学序説 ―― 苦難の美学と再起のカタルシス. Journal of Heropin Studies, 42(1), 1-38.
- 李時珍 (1578/邦訳 1952). 本草綱目 (島田勇雄訳). 春陽堂.
- 湯浅泰雄 (1980). 身体論. 講談社.
- 雨宮哲朗 (2024). 初期フィールドワーク報告：覚醒潜在型ヒロインとの接触における方法論的課題. IBARI Working Paper, WP-2024-003.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1967). The Discovery of Grounded Theory. Aldine Transaction.
- Kuhn, T. S. (1962). The Structure of Scientific Revolutions. University of Chicago Press.

筆者紹介

雨宮 哲朗（あまみや てつろう）

独立戦闘行動研究所（IBARI）特任研究員、東京都立サブカルチャー総合大学ヒロピン学研究科非常勤講師。元・第 22 悪組織〈ダークゼロ〉幹部（鋼鉄提督）。同組織解散（暦 2009 年）後、「なぜ我々は負け続けるのか」という問いを抱えて独自研究を開始。暦 2015 年に IBARI 設立に参加し、フィールドワーク型研究を専門とする。神崎楓花准教授の VOLV 仮説論文を読んだ際、「これは私が 16 年間感じていた違和感の正体だ」と確信し、本フィールドワーク研究を立案。倫理委員会との 4 度にわたる申請却下・修正を経て研究を開始した。フィールドワーク中の累計入院日数は 312 日。最長連続勤務記録は「3 日間ヒロインに追いかけられながらフィールドノートを取り続けたこと」（エンカウンター#401～#403）。信条は「敗北は最良のデータである」。趣味は正骨術（実用上の必要から習得）と読書（特に東洋医学古典）。格言：「847 回転んで 847 回起き上がったが、591 回はヒロインに起こしてもらった」。